

都留を、観察し、記録する

FIELD NOTE

no.105 Sep.

都留文科大学 地域交流研究センター・機関誌
『フィールド・ノート』 no. 105 Sep. 2020

特集

つるを歩こう

安心して外にでることもできない、
誰かに会うこともできない。
そんな不安を抱えた今、
都留をじっくり見つめ直してみました。

FIELD・NOTE no.105 Sep.



遊歩道(都留アルプス)から見た都留市街



本学4号館前にいたアゲハチョウ



楽山公園のアジサイ



都留市夏狩の湧水

18 特集 つるのお店をつづる。

20 「レストラン鎌倉」という場所

23 リエールの魅力

26 日常からすこし離れて

28 ベーグルから広がる輪

30 さんちょうを見つめる

35 FIELD・NOTE 新入生だより

40 フィールド暦

42 センサーカメラが写した動物たち

44 都留の風景写真集 一新緑の候一

——表紙写真——



本学キャンパスにあるケヤキです。
自由な移動ができない今、ふと足を
とめて樹を見上げると、雨に濡れた
幹が光を受けて、まるで生命力を宿
した彫刻のように見えました。
(2020年7月18日)



都留市田原の夕焼け



田原の滝公園の松尾芭蕉像



富士急行線の線路



苗床から顔をだすカエル

特集

つるを歩こう

8 特集 つるの自然をつづる。

10 本日でかけ日和 散歩に行こう

12 私の鳥観察

14 あしもとを見て歩く

16 ちょこっとうら山観察

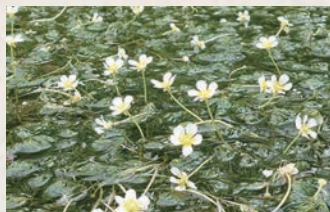
FIELD・MAP

私たちにとって、当たり前の都留の風景。本学の周辺には豊かな自然や、学生や地域のかたの暮らしが広がっています。あらためて振り返ると、はじめてそこに訪れたときの気持ちや、情景を思い出しました。



① 都留文科大学前駅

本学学生には欠かせない、移動の玄関口です。現在、待合室では「建物は、過去を知りまちのドラマを今に伝える。」という展示を行っています。



② 梅花藻

清流にしか育たない植物です。夏の終わりごろまで、長慶寺の湧水池で見られます。



③ 田原の滝

こんなところに滝があるのかと初めは驚くかもしれません。勢いよく流れる水の音を聞きながら滝の姿を眺めると、ひんやりと湿った空気を感じます。



山梨県都留市

面積 161.63km²

人口 29,894 人（令和2年7月現在）

足元の水路には富士山の湧水が流れ、身近な森ではムササビとの出会いを楽しめます。山梨県都留市では、自然と人の暮らしを近くに感じることができます。

せいほちやま 清八山 1593
ほんじゃかまる 本社ヶ丸 1630.8

つるがとやさん 鶴ヶ鳥屋山 1374.4

おすたかやま 御巢鷹山 1775

木無山 1732
三ツ峠 1785.2



⑤ 楽山公園

梅雨の時期には紫陽花の道ができます。秋には紅葉も楽しめます。都留のまちなみを眺められる絶景ポイントです。

倉見山 1456.2

大沢フィールド

富士吉田市

しゃくし 杓子山 1597.6

もしどめ 鹿留山 1832.1

忍野村

石割山 1413.6

文台山 1198.8

都留市

尾崎山 967.8

大桑山フィールド

八つ沢フィールド

とおかいちば

十日市場

桂町

大野夏狩線

桂川

加畑川

加畑

大橋

中津森

金井

大橋初狩線

至勝沼

中央自動車道

R20

中央本線

はつかり

花咲ノネル

小形山

大原

川茂

古川落

かせい

井倉

四日市場

都留バイパス

都留第二トンネル

玉川

盛里

法能

中央

つるし

あかきか

下谷

R139

都留トンネル

鍛冶屋坂トンネル

菅野川

小野

大津

大野

都留道志線

道坂

にじゅうろくや 二十六夜山 1297.3

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

大野

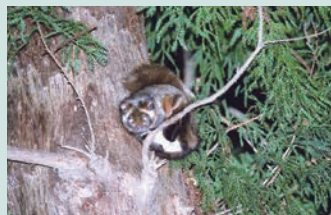
大野

大野

大野

④ ムササビの森

躍動的な滑空を見せてくれるムササビの巣箱があります。巣箱のようすは、本学ウェブサイト (<http://tsuruunv.sakura.ne.jp/html/musasabi/>) からチェックできます。





つる花を歩こう

今、家で静かな生活を送る私たちは
『フィールド・ノート』をめくると
都留の風景や匂い、誰かの声を思い出します。
これまで観察をして知った生きものの暮らしぶりや
取材をとおして聞くことができた人びとの話は
変わり映えのない毎日に活力を与えてくれました。
「遠出ができない今だからこそ
歩いていける範囲で身近な都留を見つめ直したい」。
一変してしまった日常のなかで
『フィールド・ノート』を振り返り
そんな思いを抱きました。
今回はバックナンバーを糸口に
都留のまちをもう一度探っていきます。

つるの自然をつづる。



自然あふれるこの都留で、私たちは今までたくさんの植物や生きものたちを観察し、記録してきました。今回はそのなかからとくに、大学近くにある自然について紹介している過去の記事を掲載します。都留の自然を自分の目でたしかめると、新しい発見がたくさんあります。

※左のページでは、一つひとつの記事に現在の編集部員がコメントを寄せました。



no.69 P.10-11 より抜粋

① 本日おでかけ日和 散歩に行こう

この記事は、私が大学に入学してまもないころのことを思い出させてくれます。なかなか今までとは違う生活になじめなかったとき、ふとキャンパス周辺を散歩してみました。すると新たな発見ができたり、自分の気持ちと向き合えたりと心が軽くなったのです。この記事を読むと、思わずまた外を歩きたくなります。都留というあたかなまちでの散歩は、きっと心を癒やし前向きな気分にはさせてくれるはずです。深沢有佳（比較文化学科2年）



no.83 P.28-29 より抜粋

② 私の鳥観察

私はこの記事の、鳥と遊ぶように観察するようすに惹かれました。「きっと『あっちに行け』などと言っているのだろう。」「お調子者と気の強いやつ」。本文中の言葉からはいっきに鳥に親しみを覚えます。私も鳥に近づきたい。友だちになりたい。思わずそう感じました。外出が難しい状況が続いています。今は室内で朝の鳥の声に耳をすませ、家のベランダに遊びにきた鳥を観察しています。赤松優香（国文学専攻1年）



no.89 P.10-11 より抜粋

③ あしもとを見て歩く

私が初めてうら山にいったとき、とてもわくわくしたのを覚えています。土の湿った匂いやたくさんの植物、動物たちの足跡など、どれも新鮮で驚きの連続でした。新しい発見がいっぱいのうら山ですが、私がとくに目をこらしたのはあしもとです。タンポポやスミレなど色とりどりの花たちは、心をぱっと明るい気持ちにさせてくれました。この記事はそんなあしもとを見て歩くことのおもしろさを教えてくれます。深沢有佳（比較文化学科2年）



no.94 P.28-29 より抜粋

④ ちょこっとうら山観察

大学に入学して初めて触れ合った自然がうら山でした。うら山を歩いていると動物たちの落としものや動物によく出会います。じっさいに手に取ったり、目で見たりすることは、写真などで見るものとは決して同じではありません。一つひとつに特徴があり、観察するのが楽しくなります。自分の知らない自然の世界をうら山は教えてくれました。皆さんも一度うら山をのぞいてみてください。山本義城（地域社会学科2年）

本日おでかけ日和

散歩に行こう

私の周りには、散歩を実践している人がたくさんいる。歩くことにはどんなたのしさがあるのだろうか。暖かな陽気に誘われて、私も散歩を始めてみることにした。

見ごろを迎えたソメイヨシノ
(2011.04.13)

『明』

日はおでかけ日和となるでしょう。

前日の天気予報がいつていたとおり、4月5日は気持ちよく晴れ渡った。空には雲ひとつなく、日差しがとても眩しい。時折、涼しい風が吹き抜ける絶好のおでかけ日和だ。久しぶりにスニーカーを履いて、いざ春をたのしむ散歩に出発。

街なかをゆく

人通りが多い道はずれ、ひとり陽のあたる細い路地を進んでいく。道に面した住宅の庭には大小さまざまな花が植えられ、風景に彩りを添えている。冬に歩いたときとは少し違って、街なかはどこか明るい印象だ。野山にはもちろん、街なかにも春は訪れている。

暖かい季節になり、外で遊ぶ子どもたちに出会うことが多くなった。「こんにちは！」と挨拶を投げかけながら駆けていくその姿は、春風のようにとても清々しい。なるほど、子どもは風の子、元気な子。彼らの姿を見かけると、こちらまで元気が湧いてくるから不思議だ。「よし、彼らに負けないフットワークで歩いていこう」。そう心に決めながら、週末の散歩は続いていく。

分かち合う春

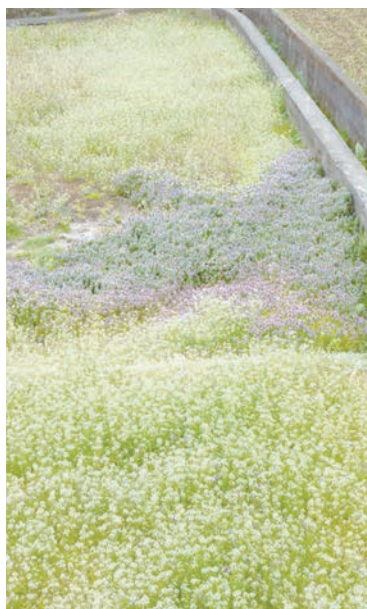
桜の蕾がふくら

みだすと、屋外に赴く

たのしみはもつぱら桜を観察することになった。今までは花が開いたときにしか意識したことがなかったけれど、散歩を続けるうちに枝先へ目を向けるようになっていた。時々足を止め、蕾のふくらみ具合を見たり、満開はいつごろかなと予想してみたりする。いたって簡単な観察ではあるものの、定期的に訪れることで刻々と移り変っていく花のようすがよくわかり、些細でも変化している点を見つけるのがおもしろかった。

はじめは、こうして桜が開花していく過程を自分ひとりでのしんでいるつもりだった。でもふと視線を下ろすと、私と同じように頭上を仰ぎ、桜に見入りながら歩く人の姿がたくさんある。ときには道すがら行き交う人と、お互い視線をおろした瞬間に目が合ってしまうことも。そんなときは少し照れくさいけれど、同じものに魅せられているという実感が小さなよろこびとして湧いてくる瞬間でもあった。





ナズナの花の白さに
ヒメオドリコソウの紫が映える
(2011.04.10)

4月10日、この日は編集部で4人で桜の名所、勝山城跡へでかけた。散歩はひとり歩くのもいいけれど、誰かと一緒に歩くのもまたよさがあると思った。

春を探し、見つめる視線は人によってさまざまで、それぞれが注目するポイントは違う。農作業が始まった畑や、足元に咲く草花、桂川の釣り人など、ほかの人に指摘されなければ見落としていた光景、気づかなかった春の一面が意外に多かった。数人の仲間と連れ立って歩くことで、それぞれの発見や各自が見ている風景を共有することができ、自分の視野がどんどん広がっていく。

勝山城跡を目指して歩くなかで、複数の視点から得るものが多いこと、誰かと分かち合うたのしきがあることを知った。

雨上がりの匂い

当初私は、雨の日に歩くのが億劫^{おっくう}だった。雨水で服やカバンが濡れるのはいい気がないし、なにより靴が濡れるのが好きではなかった。でも散歩をするようになって、その捉え方は少しずつ変わっていく。

しとしと雨が降る日の散歩は、感じるものがとても新鮮だった。霞がかった山並みは普段よりも色濃く、ひととき鮮やかな新緑が目飛び込んでくる。人影の少ない街なかにはひっそりと雨に濡れ、道も建物も晴れの日には見せなかった表情をしている。たえず穏やかな雨音が聞こえる街からは、いつになく静まりかえった雰囲気を感じた。

帰路につくころには雨が上がって、日が差し始めた。気温が上昇するにつれて、雨上がりの独特の匂いがやってくる。この匂いを言葉でどう表現したものか。その場に臨めば、「そうそう、この匂い」とわかるのに、素直にびんとくる表現が思いつかない。いったい、なんの匂いなのだろう。花や木などが放つ匂いだろうか。それとも土の匂いだろうか。はたまた湿ったアスファルトの匂い……？



雨上がりの大学周辺 (2011.05.01)

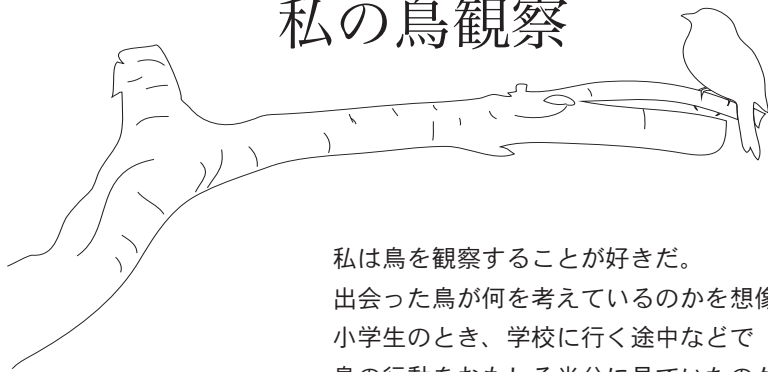
うまく言い表せない菌がゆきを感じながらも、いつもと違う空気について深呼吸したくなった。

* * *

同じところを歩き、同じものに注目するなかでも、その季節や天候、時間帯といったもので、周囲の見え方や感じ方が変わってくる。その日によつては、思いがけない発見や新しい出会いのきっかけにつながっていく。ときに誰かと一緒に歩くことは、きつとその手助けにもなってくれるだろう。前日の天気予報はあまり気にせず、思い立ったら迷わず屋外に足を運んでいきたい。

私にとって晴れの日も、雨の日も、いまではそれぞれが魅力ある「おでかけ日和」になっている。

私の鳥観察



私は鳥を観察することが好きだ。

出会った鳥が何を考えているのかを想像しながら見ている。

小学生のとき、学校に行く途中などで

鳥の行動をおもしろ半分に見ていたのがきっかけだった。

大学生になった今も、そんな見方を変わず続けている。

小俣溪和(社会学科1年) =文・写真

入学当初、鳥を見ようと思って行つたところが楽山公園だ。最初に姿を見せたのがヒヨドリ。「ヒヨロピーヨ」と大きく響く声で鳴きながら頭上を飛んでいったのが印象に残っている。正直なところ、彼らを見かけてもあまり嬉しくない。言いかたは悪いが「いつでも見られる。今見に来たのはお前たちじゃない」。そんな気持ちだ。でもヒヨドリたちのことは嫌いではない。勝手に思っていることだが、気の合う友だちのような感覚だ。

お調子者と気の強いやつ

それからまたたび訪れると、公園のネズミの木でシジュウカラの鳴き声が聞こえた。鳴き声はしているのに姿が見えない。鳴き声をたよりに居場所を探す。見つけた。カメラを構える。それと同時にチョンチョンとステツプを踏むように枝の上を移動して逃げられる。からかわれているようでちょっとくやしい。見ているだけではなく、どこまで警戒されずに写真を撮れるかも、鳥を見ることの楽しみのひとつだ。

遊歩道を少し登つたところではヤマガラを

見ることができた。ヤマガラは私カメラを向けてもすぐには逃げずに「ニーニーニー」と怒つたように鳴いて、私を威嚇してから飛び去つていった。きつと「あつちに行け」などと言っているのだろう。私のシジュウカラのイメージはお調子者。ヤマガラは気の強いやつだ。

争奪戦

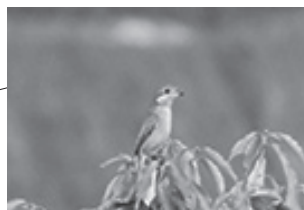
10月20日には本学自然科学棟の外階段から楽山公園方面を見渡して観察してみた。今までの楽山公園での観察と違っていたのは、モズを初めて見られたことだ。

そのまま数十分見ていると、モズとヒヨドリの場所の奪い合いがはじまった。モズが木の頂上に留まつて鳴いていると、ヒヨドリがそのモズに向かって鋭い鳴き声で鳴きながら飛んで来て場所を奪う。今度は木から飛んで逃げたモズが、一度空中で体勢を整えるように旋回してからヒヨドリに向かう。そして、しばらく同じような奪い合いを繰り返したあと、ヒヨドリが遠くへ飛んで行ってしまった。モズが勝つたようだ。

楽山公園で出会えた鳥たち



ヒヨドリ



モズ



セキレイ



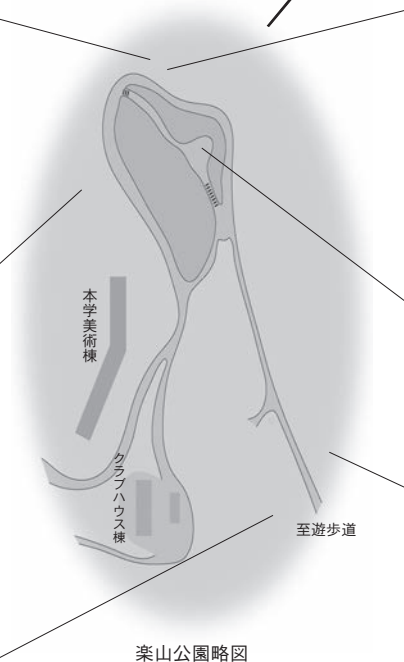
シジュウカラ



キビタキ



ヤマガラ



楽山公園略図

鳥に近づく

モズが鳴いていた木の頂上は、今まで観察していたときにヒヨドリがいることが多かった場所だ。ヒヨドリは自分の縄張りへ入って来たモズが気に食わなかったのだろう。

観察していると、鳥は私を警戒していることが多い。カメラのレンズ越しに鳥をはつきり見たとき、彼らの目がまっすぐにこちらを見ていることにドキッとする。きつとそのときはまだ、鳥に近づけていない。毛繕いをしていたり、仲間同士で何かをしていたりと自然な姿を見ていたい。それは鳥に近づけたときに見られるものだと思う。

鳥を見ることが、写真を撮ることも魅力的なことだ。けれど、私にはそれより楽しいことがある。それは鳥の気持ちを考えることだ。鳥と出会ったとき、彼らが何を思っているのか。勝手な想像だけど、彼らのようすを自分なりに感じ取って、気持ちも鳥に近づけたと思うのが嬉しい。自分の観察の仕方、鳥に対して思っていることを深く考えてみて初めて気がついた。鳥に近づきたい。それが今の私の鳥観察だ。

あしもとを見て歩く

うら山を歩くとき、私はあしもとを見ていることが多い。あしもとに咲く花や草が好きで、いつのまにか目を向けている。

南條新（初等教育学科3年）＝文・写真

うら山の地面にはさまざまな植物が生えている。私がふだんとおる山道は踏み固められているため、あまり植物は生えていない。踏み入られることの少ない、道の両脇には草花が並んでいる。

春は花に目がいく。緑色の葉が茂る地面から、花びらの色が浮いて見えるからだ。花はうら山に入つてすぐの、日当たりの良い斜面にたくさん生えていた。そのあたりは、林というより草むらだ。私にとってその場所で花を見ることが、春のうら山での一番の楽しみだ。見られた花はタンポポやハルジオン、ヒトリシズカやスミレの仲間など。黄色や白色、薄紫色の花びらを見ると、春がやってきたのだとしみじみ思う。

しゃがんで花を覗きこむ。すると、いつもはあしもとにちよこんと咲いている花の、細かいところが見えてくる。種類ごとのちがいまではつきりと見えるのだ。たとえば、うら山の斜面にたくさん咲いていたタチツボスミレ。この植物の葉はハートのような形で先がとがっている。いつばう近くに咲いていたマルバスマスミレの葉は、名前のとおり縁が丸い。



タチツボスミレ

左) 細長い茎が花びらを重たそうにぶら下げている 中央) 1カ所に集まって咲いていた 右) ハート型の葉が互いちがいに生えている



(2016.03.29)

マルバスミレ

右) 白い花びらがすてきで一番好きな春の花だ
左) 上から見ると葉のようすが見やすい



(2016.04.21)

この2種類をはじめて見くらべたとき、とても興奮した。同じスミレという名前がついているのに、葉の形は全然ちがうからだ。ひとことにスミレの仲間と言っても、花の色がちがったり、葉の形がちがったりと、種類ごとに個性があつた。それまで私は植物というと、緑の葉があつて花が咲くものくらいに考えていた。けれど細かい部分まで見ることで、種類ごとの個性を知れて、そのぶん植物に近づいた気持ちになれた。うら山にはもつとたくさんさんの植物が生えているし、きつとその種類の数だけちがいがあつた。そう思うと、今まで以上にあしもとを見たくなつてきた。

* * *

うら山のあしもとを彩る草花は、枯れたり食べられたりしなければどこかへいつてしまうことはない。だから好きなだけ触ったり覗きこんだりして観察することができ。そうやって何度も見たものには愛着が湧いていく。うら山へかよつていくにつれて、あしもとに好きなものが増えていくのだ。



(2016.04.29)

スミレの次に好きな花

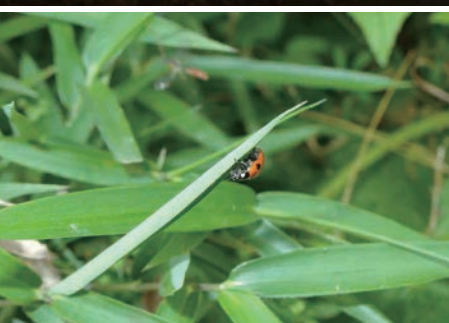
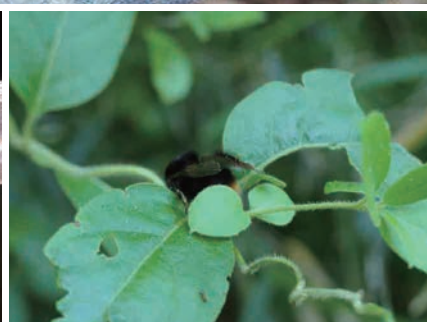
左) によきつと生えるフデリンドウ
右) ヒトリシズカ。花がブラシの毛のよう



(2015.04.16)

ちょこっと うら山観察

センサーカメラ(※)を仕掛け、夜の動物を観察することを目的に本学のうら山へ足を運んだ。ところが昼のうら山には、今まで見落としていた魅力がたくさんあった。



- | | | |
|---|---|--|
| | | 1: リスの食痕 (2017 年 6 月 9 日) |
| | | 2: センサーカメラがとらえたコウモリの仲間。カメラ目線で写っている (2017 年 6 月 11 日) |
| 1 | | 3: 葉っぱの上で動かないマルハナバチの仲間。近づいても動かなかった (2017 年 6 月 14 日) |
| 2 | 3 | 4: ナナホシテントウを見つけ撮影。写真を撮ったあと、すぐに飛び去ってしまった (2017 年 6 月 9 日) |
| 4 | 5 | 5: アナグマが掘った穴。穴の大きさは 20 センチほどである (2017 年 6 月 9 日) |
| | | 6: センサーカメラに写っていたハクビシン。ふさふさとした毛並みが印象的 (2017 年 6 月 27 日) |

夜に活動する動物を見たいと思ってセンサーカメラを仕掛けに行ったのは、6月14日のお昼すぎだ。空にはもくもくと膨らむ入道雲が浮かび、歩いていると汗があごまで伝ってくるくらい暑い日だった。昼間、本学のうら山を歩く機会はこれまでも何度かあった。いつも「動物に会えるかな、会えたらいいな」と思いながらうら山を歩いたが、一度も出会えたことがない。今日はどうか、とあたりを観察しながら歩いていると、多くのものが目にとまる。

新しい発見がたくさん

歩いていてまず気になったのは、半分に割れたクルミの殻だ。この日は約3か所で見つけた。豚の鼻のようにも見えるクルミの殻は、リスの食痕だという。私たち人にとってはとてもきかないと思うほど、きつちり半分に割れている。リスの器用さに感心した。

うら山を奥のほうへと歩いていくと、アナグマが掘った穴を見つけた。丸い穴の片側のみ、土がこんもりと積もっている。穴を見たとき、私は真つ先に実家で飼っている犬を思い出した。我が家の犬が耳をパタパタと上

下に揺らしながら、鼻に土がついてもおかまなしで掘った穴にそっくりだ。アナグマも、わき目もふらず穴を掘り続けたのかな、と想像する。アナグマの息づかいが聞こえてくるようだった。

この日一番の発見は、葉っぱの上でじっとしているマルハナバチの仲間を見つけたことだ。ハチと聞くと、毒があつて攻撃してきそうなイメージが私にはあり、近づきたいと思えない存在だった。でもこの日見つけたマルハナバチは、もふもふと毛をはやしたお尻をこちらにむけ、葉っぱの上から動かない。胴体もお尻も毛がはえていることを確認できるくらい、間近で見ることができた。葉っぱの上でひなたぼっこをしているうちに、うたた寝をしてしまったようにも見える。同行してくださった先生は「ハチのなかでもおとなしい性格なんだよ」と教えてくれた。納得の姿である。ハチは今まで私のなかで、近づいたら刺されそうで怖い存在だった。それが「より近くで見たい、触ってみたい」という印象が変わった。

うら山に登る機会がなければ、マルハナバチの仲間はおとなしい性格なのだというこ

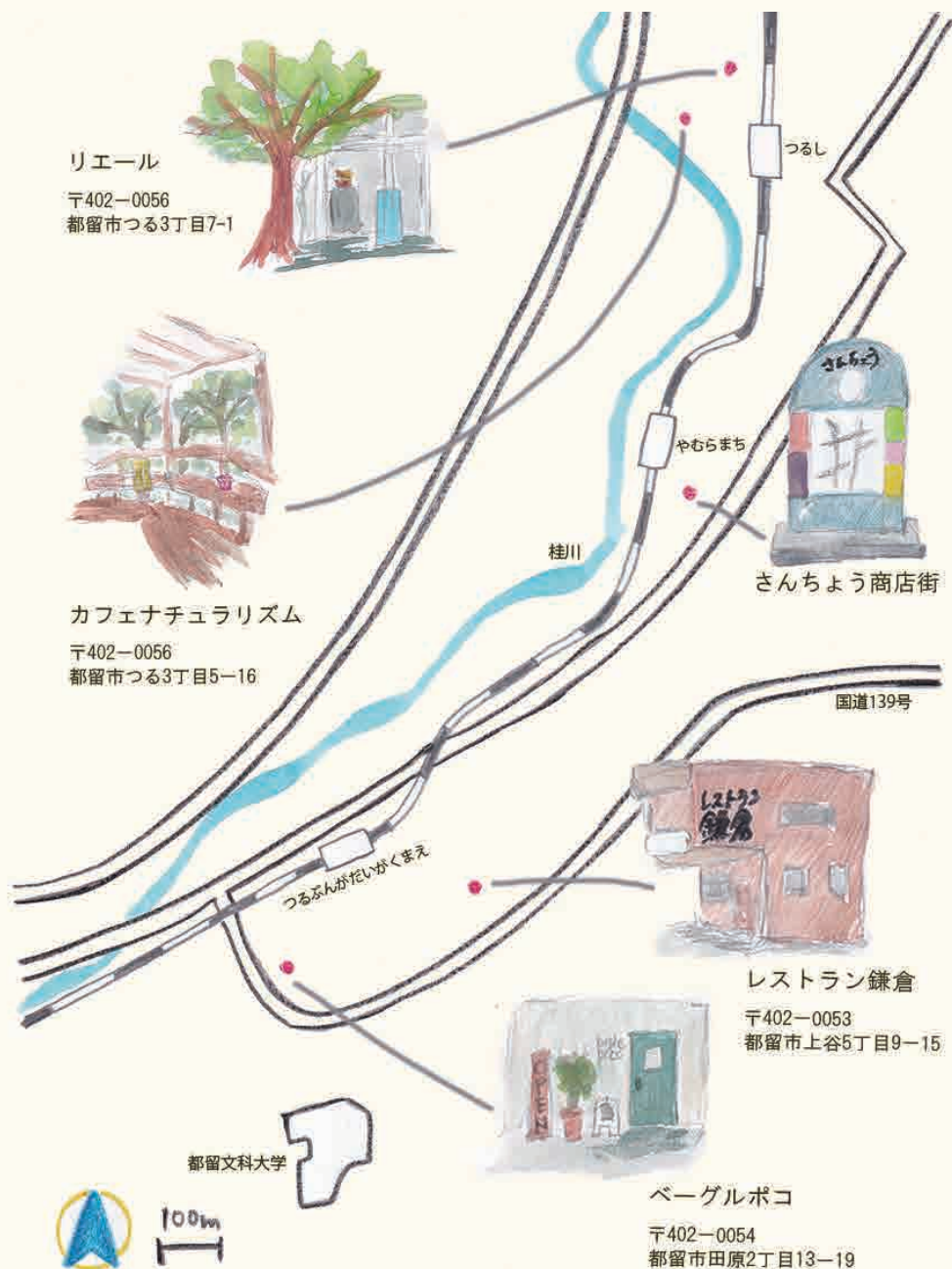
に気づけなかっただろう。この日見つけたハチの後ろ姿がずんぐりむつくりとしていて、思わずそつと撫でたくなるような容姿をしていることも。

虫って魅力的

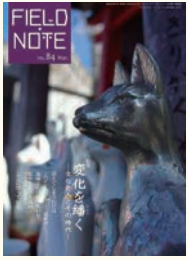
私は今まで虫が大の苦手だった。手の小指の爪より小さい虫でも、見つけると悲鳴を上げてすぐに距離を置いていた。しかしうら山に何度か足を運ぶうちに、虫を見つけると「シャッターチャンス！」と思い、素早く近寄るようになった。これまでの自分からは考えられない大きな変化だ。

今回の目的は、夜に活動する動物をセンサーカメラを仕掛けて確かめることだった。しかし昼の山を歩くうちに、いつの間にか私は虫を見つけても逃げ出さなくなっていた。自分が苦手なもののでも、知れば知るほど苦手意識は薄れていく。好きではないから知らないままでもいいやと興味をなくしてしまうのではなく、一度向き合ってみることも大事なのだということを、マルハナバチが教えてくれた。

つるのお店をつづる。



うつり変わる商店街のなかで今も残る人びとの営み。
なぜかもう一度食べたいくなる味。
都留にあるお店の種類は多彩です。今回はバックナンバーに
掲載されているなかから5つのお店をお届けします。
※左のページでは一つひとつの記事に現在の編集部員がコメ
ントを寄せました。



no.84 P.30-32 より抜粋

1 「レストラン鎌倉」という場所

この記事では、「レストラン鎌倉」のマスターの料理に対する信念やお客さんへの思いを感じることができます。マスターにとって常連さんは「人間的に成長できる」存在だそう。そう思えるのは、本音で会話をし相手を尊重しているから。記事を読んで、あらためて人との関わりかたを考えさせられました。宇佐美温加 (社会学科4年)



no.91 P.42-44 より抜粋

2 リエールの魅力

初めて「リエール」に友人と訪れたとき。お店にぎゅっと詰まった、花、雑貨、本たちに胸をときめかせて、つい時間を忘れて長居をしてしまいました。「ゆったりとして温かい空間だったね」と言いながら上機嫌で帰路につきました。この記事は、そんな空間を創り出している店主の人柄がたくさん表れています。読み返すと、あの温かい雰囲気思い出しました。宇佐美温加 (社会学科4年)



no.90 P.30-31
より抜粋

3 日常から少し離れて

都留市駅の近くにある「カフェナチュラリズム」。使われていなかった小屋を改修して作られたカフェです。川のほとり、ランタンの橙と木々の緑に包まれた空間は、子どものころにあこがれた秘密基地のよう。それでいてどこか大人な雰囲気もあるこの場所は不思議な魅力に包まれています。渡邊唯 (地域社会学科2年)



no.95 P.32-33
より抜粋

4 ベーグルから広がる輪

大学から歩いてすぐの場所にある「bagel poco」。白い扉を開けた先にはこんがり焼かれたベーグルが並んでいます。店主は、都留市にはたくさんのパン屋さんがあるから流行らない、と商品をベーグル一つに絞ったといいます。この記事からはそんな店主の強い決心と、店内のあたたかみのある写真が見て取れます。風間悠花 (地域社会学科3年)



no.98 P.36-37
no.99 P.42-44 より抜粋

5 さんちょうを見つめる

前編後編にわたって書かれた「さんちょうを見つめる」。都留市にある商店街は、人びとの暮らしやまちが移り変わるようすがうかがえます。記事に掲載されている手書きの絵のなかから、気になるお店を探して店主に会いにいつてみてはどうでしょう。さんちょう商店街を歩くと一日があつというまに感じます。風間悠花 (地域社会学科3年)



「レストラン鎌倉」という場所



そこは洋食のレストラン。

私はアルバイトとして働いていて、マスターやお客さんの人柄に惹かれた。そんな魅力的な人々が集まる「レストラン鎌倉」という場所は、働く人、訪れる人にとってどのような存在なのだろうか。前編では、マスターにとっての「レストラン鎌倉」とはなにかお話をうかがう。

加藤明香（初等教育学科2年） 文・写真

おなじま食品館の向かいにある道を通ると、ふわりと香ってくるお腹がすく匂いに思わずその出所を探してしまう。

薄黄色の外壁に、木製の扉。扉を引くとカランと鈴の音がなり、目の前に広がるのはレトロな雰囲気のお店。長く使用していることをうかがわせる、こげ茶色を基調とした椅子と机、薄い灰色の壁は上から降り注ぐライトの光で暖かみのあるクリーム色に見える。重厚な趣きのあるようすに一瞬かしこまってしまふけれど、奥から聞こえるマスターの「いらつしゃいませ」という明るくて気取らない声に安心する。夕方になると、店内は橙色のライトが際立ち、穏やかな雰囲気へと変わる。



「レストラン鎌倉」を営む中村圭二さん^{なかむらけいじ}（52）は、マスターの愛称で親しまれており、お店に出す料理は仕込みから調理まですべて一人でなさっている。今の経営者はマスターだが、「レストラン鎌倉」自体はマスターが経営する前からあり、かつてはご自身もこのお店でアルバイトをされていた。大学卒業後、会社勤めをしていたあるとき、当時経営していたかたがお店を離れるということで、マスターに譲ってくださったことになったという。

どうして「レストラン鎌倉」を継ぐことにしたのか。お店を継いだ理由には、もともと料理などを作ることが好きだという気持ちが大きく影響しているという。

お店を継いでの3ヶ月ほどは、余裕がなく現在よりも忙しく感じたそう。それに比べて今は仕事が身に付き、余裕がもてるようになった、とおっしゃるようすは過去の自分へ懐かしむようだった。今では忙しいときでもお客さんと会話をしながら調理をしたり、アルバイトのしている作業まで把握していたり、自分以外のことにまで気を配っている。

そんなようすを見ている私からすると、余裕がなかったという当時のようすは想像しにくかった。

自分の信じる「美味しい」

働いていて、ここの料理は美味しいから紹介したい、と友人や恋人と一緒に来るかた、美味しいと噂を聞いて遠方からいらつしやるかたが多いように感じる。帰るときにはみな「美味しかった」と満足した表情をしているから、料理を作っていない私まで誇らしくなる。マスターが作る料理は、思わずだれかに教えたくなるような味なのだ。

この味はどうやって見つけたのか、厨房に立つマスターに尋ねた。すると、味を決めるとき基本となっているのは、これまでに自分が食べてきたものから学んできた味だという。そのなかから、「美味しい」と思った味をお客さんに出しているとおっしゃっていた。

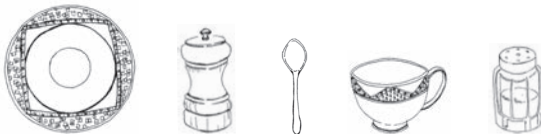
お店に来るお客さんは子どもからお年を召したかたまでさまざま。どうやったら自分

の味が幅広い年齢のかたに美味しいと思ってもらえる味になるのか、さらにお客さんのようすから学んだそう。口に出さなくても美味しい料理は残さず食べるもの。食べ終わったお皿を見れば、その人が満足してくれたのか分かるとおっしゃった。マスターが今までに美味しいと感じてきた味が、「レストラン鎌倉」の味を支えている。

相手を認めるということ

このお店ではお客さんとマスターのあいだに多くの会話がある。なかでも常連さんとは話をすることが多い。その内容は、共通の趣味や最近のニュースなどだ。

私はお客さん相手と考えると、相手に好意をもってもらおうと自分の本心とは違うことを言ってしまうときがある。しかし、マスターはお客さんと話すさい、すべて本音で話しているという。それはとても勇気があることだろう。心がけようと思っても簡単にできることではない。



「レストラン鎌倉」創業以来、ずっと使われてきたメニュー表。今日はなにを食べようか、その楽しみがこのなかにつまっている

マスターにお客さんと本音で接する理由をうかがうと、「本音じゃないと相手を認められない気がする」とおっしゃった。自分が感じた通りに、思った通りに接したほうが間違いない、とカウンターで腕を組み、堂々としたようすで話してくださる。嘘の気持ちを重ねていってもいずればぼろつと本音が出てきってしまう。その本音が相手を傷付けるものだつたら、今まで築いてきた関係は崩れるだろう。だから本音でいたほうが間違いがないと、

言葉を選び出すように話してくださる。それは相手と本気で向き合うという意味だ。

常連さんは、食事をしに来るということもあるが、マスターと話をしたくて来るというかたも多いように見える。お客さんがときおり漏らす、ちよつとした弱音や、嬉しそうにほおを緩ませて話すうちわの話から、マスターに心を許していることが分かった。マスター自身が本音で話すからこそ安心して、お客さんも本音で話そうと思えるのだろう。「本音で話しています」なんて、口に出して言わなくても自然と伝わるものなのだ。マスターは相手の話に関心をもち、聞くとうとしている。そのようすから相手の考えを受け入れることができるかたなのだと感じた。その人柄がお客さんのお店で過ごす時間をいつそう楽しいものになっているのだ。

この場所は

最後に、マスターにとって常連さんがたはどのような存在なのかうかがうと、

「(自分にとって) 人間的に成長できるお客さんが常連さんに多いのかな」

自分でも気が付かなかつたけど、と付け加えて今までを振り返るように話してくださった。

「レストラン鎌倉」という場所はマスターにとって、日々の何気ない会話から相手の価値観や考えかたに触れることができる場所なのだろう。そのうちに自分のなかにはなかつた新しい捉えかたを見つれたり、自分のなかにもともとあつた気持ちを再確認できたりするのだとマスターの言葉から感じられた。

そう考えたとき、働く側としてお店に関わっている私も、この場所に訪れたお客さんと新しい価値観を分かち合える一人なのかもしれないと気が付いた。すると、自然とお客さんのもつ考えや言葉を知れることをもつと大切にしたいと考えるようになった。

「レストラン鎌倉」

住所 山梨県都留市上谷 5-9-15
TEL 0554-45-1131
定休日 木曜日
営業時間 11時〜22時(21時半オーダーストップ)



リエールの の魅力



都留市駅から少し離れた場所に、ひっそりと店をかまえる「リエール」。私をふくめ、多くの人にとって特別な場所になっているように感じた。どうしてこんなにも「リエール」に惹かれるのだろう。

都留市駅の裏にまわって、中央自動車道

のほうへ5分ほど道沿いに歩くと、右手に「リエール」と書かれた看板が見える。お店の前に、どつしりと積まれた薪が印象深い。ガラ

ス張りの大きな扉を引いて、なかに入る。左手には柵いっぱいの本。右手には華やかというよりも、見ていて落ち着く色をした生花やドライフラワー。その奥の、以前は外だった部分を改装した一室には古道具が並ぶ。

ここにちは、と店主の三澤賢子さん(49)に挨拶すると、いつも笑顔で迎えてくれる。

「リエール」は花をはじめ、古道具の販売をしているお店だ。三澤さんの手作りの雑貨もあった。それだけでなく移動販売や写真展、フェルト作品展などの企画展もおこなう。店内ではお茶を飲むことができ、テーブルと椅子が置かれたスペースもあって、お客さんが自由にくつろげる。訪れると、ついゆつくりしてしまう。

お店に置かれたものたち

白い壁に白熱灯やキャンドルの光が映える。ぼんやりと暖かな光に包まれると、自然とおだやかな気持ちになる。お話をうかがっ



三澤さんが作った雑貨たち。「リエール」を不定期営業にすることで、雑貨を作る時間を確保している(2016.11.06)



壁にかけられた振り子時計。2日で止まってしまうのでそのたびに巻き直す。手間のかかる感じが気に入っているのだという(2016.10.17)

ている途中、壁にかけられた振り子時計がボンボンボンと鳴った。少し低い音が心地いい。20年ほど前に、この時計を見かけてひとめぼれしたという。それから古いものの良さを知り、この時計に似合う空間を作ろうと考えた。お店の一角に置かれた足踏みミシンは、三澤さんが自宅の物置から出てきたものだ。そのほかにも、小さいころの落書きが残っている大きなステレオ、鉄製で背の低い扇風機、今では珍しい二眼レンズのカメラ。すべての家具がお店になじんでいる。ここには三澤さんの好きなものがたくさん詰まっているように感じた。

ここから生まれる出会い

小道沿いにある「リエール」は、あまり人通りが多いところに建っているとは言えない。私がお店を見つけたのもたまたまだった。どうしてここにお店をひらこうと思ったのか、うかがってみた。「お客さんに、ただ花を買って帰るだけでなく、ちょっとゆつくりしてもらえる花屋がいいと思って」。駅前など人通りが多いところも探したが、ピンとくるところがなかったという。たしかに人通

りが多いところにお店があつたら、こんなにゆつたりとした空間は作れなかっただろうなと思う。

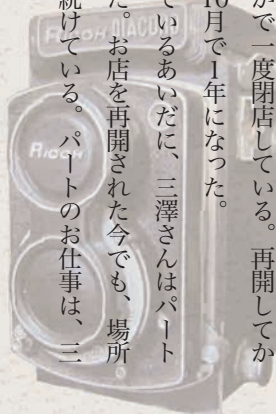
「お客さんがわざわざ足を運んでくださる形なんですけど、ここだからこそ、かえってゆつくりしてもらえる」。お話をうかがっている最中も、たくさんのかたがお店を訪れた。

お客さんが「リエール」を訪れる理由はさまざま。花を買いに来たり、企画展を見に来たり、三澤さんと話しに来たり。お客さんがそれぞれ異なる目的をもつてひとつのお店を訪れる。そこではじめて出会った人どうしが挨拶を交わす。椅子に腰かけ、お茶を飲みながら、時間を忘れて会話をする。「リエール」はお客さんどうしの出会いと交流の場にもなっている。

考えかたの変化

1992年に開店した「リエール」。長い歴史のなかで一度閉店している。再開してから今年の10月で1年になった。

閉店しているあいだに、三澤さんはパートをはじめた。お店を再開された今でも、場所は違うが続いている。パートのお仕事は、三



澤さんの考えかたを大きく変えたできごとのひとつだった。昔は本業以外の仕事をすることに抵抗があったという。本業がうまくいっていないと思われるのではないか。そんな不安があったそうだ。

でもじつさに働いてみると、本業をしているだけでは分らなかったことや足りないことを学ぶきっかけになった。「リエール」ばかりに集中していると、自分のやりたいことを自由にできるぶん、夢だけに生きがちになってしまう。けれど外で働くことで、現実的なことが見えてくる。夢も大事だけど、夢ばかり見ていては周りが見えなくなってしまう。パートで現実的な部分を経験して、「リエール」にとり入れることでバランスをとっているのだという。

自然体でいること

三澤さんはとても自然体なただ。お店で出しているお茶は自分が好きなものを選んでいて、「もし人気がなかったら自分で飲めばいいかってゆるく楽しんでいる」と笑う。ありのままの飾らない姿に、素敵だなと思う。飾らない姿勢は、お客さんにも影響を与



お茶のメニューは日によって変わる。お店をはじめめる前から、お茶を出す花屋にしたかったのだそう(2016.10.17)

える。「自分の自然体な感じが影響して、お客さんにも気軽に寄ってもらえる場所になっていると思う」とおっしゃる。店内には、お客さんのにこにことした表情が溢れていた。三澤さんもお客さんもリラックスして、とても楽しそうに過ごしている。

そんな三澤さんも、以前は気を張って「リエール」で仕事をしていたという。きつちりしているという周りの自分へのイメージを壊しちやいけないう。そんな思いでお店に立っていた。でも、パートでの経験が三澤さんを大きく変えた。長年付き合ひのあるかたから、変わったねと言われるほどだそう。

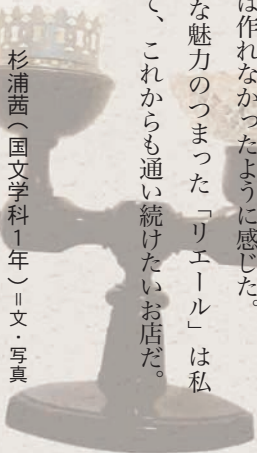
* * *

私をはじめてお店を訪れたとき、三澤さんはとても気さくに話しかけてくださった。2回目は、少しあいだが空いたにもかかわらず、私のことを覚えていてくださった。些細なことだけど、とてもうれしくて今でも忘れられない。

私は「リエール」が好きだ。はじめはただ、商品やお店の雰囲気が好きなのだと思う。けれど、三澤さんの人柄にも惹かれていて、それも含めて好きなのだと気がついた。

「リエール」の魅力は、ほかでは見かけないような雑貨や家具、ゆつくりと流れる時間、人との出会いと交流があることだ。本業以外のお仕事や、閉店というさまざまな経験をした三澤さんでなければ、こんな魅力いっぱいのお店は作れなかったように感じた。

そんな魅力のつまった「リエール」は私にとつて、これからも通い続けたいお店だ。



杉浦西(国文学科1年) 文・写真
高橋未瑠来(社会学科3年) 写真
平岡摩梨菜(社会学科1年) 写真

日常から すこし離れて



都留市駅から中央高速道路に向かって10分ほど歩いたところに、木々に囲まれたカフェがある。お店の名前は「カフェナチュラリズム」。マスターである、ヒーコさんこと若林英行さん（48）が11年前に小屋を改修して作ったカフェだ。



注文を受けてからチャイを作り始めるヒーコさん

初めて店内へ入ったときのことをよく覚えている。店内を照らすランタンの明かり。5m四方ほどの広すぎない空間。木製のテーブルやイス。カウンター席の向こうに並べられたお酒のボトル。席に座って少しヒーコさんと会話を交わす。お店の居心地の良さを実感した。日常生活から少しぬけて一息つける。そんなカフェの心地よい雰囲気に着かれて、後日ヒーコさんにお話をうかがった。

川から見つけた場所



ヒーコさんにはカフェを開くなら「いい場所」を選びたいという想いがあつた。カフェの場所探しについて、「けつこう町のなかも探したんだけど、なかなかピンとする場所がなくてさ」とおっしゃる。同級生にバスを使ってスポーツバーをやらなにかと誘われたこともあつた。しかしそれもまたピンと来なかつたという。ようやく見つけたのが今のカフェがある場所だつた。ここは、人が数年住んで



大人っぽさを帯びた雰囲気のにめれつつも、店内に入っ
てしまえば少し大人になった気分を味わえる

いなかつたせいでまわりが背の高い草で覆われていたという。見つけたときのことを詳しくうかがうと、カフェのすぐ下を流れる桂川を散歩していたときに見つけたそう。道路からではなく、川から見つけたとは想像してなくて驚いた。

7月12日の昼下がり、じつさいに川をヒーコさんに案内していただいた。この場所を見つけたときと同じ道をたどる。ヒーコさんは当時を思い出しながら「そのときは冬でさ。工事かなんかで偶然、川の水が少なくて、いつもは歩けないところがそのときは行けてさ」と話してくださつた。ヒーコさんは足を



川から見たカフェナチュラルリズム。ヒーコさんの見上げた場所から

止め、「で、こう歩いて来て、なんかあそこに家があつて」と川を挟んだ対岸にあるカフェを見上げる。当時のヒーコさんも同じように小屋を見つけたそうだ。「お！ みたいな感じで。ピンと来たかも」とおっしゃる。

改めて川からカフェを眺める。木々に囲まれてひっそりとたたずむカフェの姿は、子どもたちの作った秘密基地を思い出した。

カフェのある岸のほうにも行ってみた。

ヒーコさんは「下に降りて川レベルで見ると気持ちいいよ」とおっしゃる。岸の石の上には

降りて上流を向く。しゃがんで川と同じ目線で風景を眺めてみた。ヒュウと涼しい風が顔にあたる。自然にホッと一息ついてしまう。

「瞑想とかしたことなくても、瞑想しちゃったりね」とヒーコさんが笑いながらおっしゃる。その石の上に乗って川を眺めると本当にそんな気分になるから不思議だ。

ヒーコさんの感覚



ヒーコさんのお話には、はつきりとは言葉に表せない気持ちがあつたたび登場した。「いい場所」や「ピンと来た」というものがヒーコさんのなかにあるようだ。ヒーコさんがどんな感覚でものを選んでいるのかを知りたくて「お店の雰囲気壊さないために、こんなことは避けてるとか、しないようにしていることありますか」と尋ねてみた。するとヒーコさんは「自分の判断基準みたいなものだよな？」とつぶやくと、しばらく悩まれる。どう言葉にしようか悩んでいるように見えた。そして「それは自分のなかにしかないんじゃないかな」とおっしゃった。

ヒーコさんのなかにしかない感覚。わたしはお店の内装や外装を見て、ヒーコさんの言

葉の意味がお店の雰囲気表れているように感じていた。カフェが木々に囲まれていることや店内のランタンの明かり、大人っぽい雰囲気は、ヒーコさんのなかにある「いい」という感覚のつめあわせなのだと思う。

ヒーコさんは場所を見つけたときに「ピンと来たかも」と表現していた。はつきりとは言葉にできないけれど、心が動かされるとき。そのとき感じる気持ちを大切にされているように思えた。

心が動くとき



わたしはときどき、ものごとを理屈で考えてしまいがちになる。理路整然にしなければ、と思えば、頭ばかり考えてしまう。するとそのぶん心の動きに気づけなかつたりする。ふと石の上で気持ちが安らいだり、カフェの心地よさに惹かれたとき、まわりの雰囲気や体で感じとっていたことに気がつく。理屈でものごとを考えるのは、ひとつのわたしらしきかもしれない。けれど、自分の気持ちやまわりの雰囲気をすなおに感じることも同じぐらい大切にしたいと思う。

ベーグルから 広がる 輪

硬いイメージがあったベーグルは、やわらかくてモチモチ。素材を生かした優しい味がする。そんなベーグルを作っているのは、小俣百合香さん(39)。店内にはおいしいベーグルと小俣さんが作り出すやわらかい雰囲気がいっぱいに広がっていた。



ガラス張りの棚にきれいに並べられたベーグル。見た目もかわいらしく、食欲をそそる(2017年10月20日)

小俣さんが4年前にオープンしたベーグル専門店「ベーグルbagel poco」は、本学横の道(通称オレンジロード)を下つてすぐのところにある。

薄い水色の扉を開けると、店内はやわらかい色の照明と窓から入る陽の光に照らされている。木目調の床や棚、小俣さんが集めたお茶碗やドライフラワーなどの雑貨もあり、温かく素朴な雰囲気を醸し出している。訪れるたびに、なんだか心が落ち着く。

相手を想う

小俣さんは趣味でパンを作り始めた。20歳のときから自分のお店を持ちたいという夢があったそう。地元は大月市だが、大学があり人通りの多い都留市にお店を構えた。はじめは、パン、ベーグル、焼き菓子のお店にするつもりだった。しかし都留市内にはたくさんさんのパン屋さんがいるから流行らない、とベーグル一つに絞ったそう。



種類ごとにていねいに説明が書かれたカード。そのベーグルの特徴がすぐに分かる(2017年10月20日)

営業日は1週間のうち月曜、水曜、金曜の3日間。営業日の前日は生地を12時間寝かせてゆっくり発酵させるなどの仕込みにあてている。ひとつひとつの作業をていねいにするためにたどり着いたやり方だそう。なぜ3日間しか営業していないのか聞かれることも多いそうで、「本当は毎日できればいいんですけどね……」と、手を頭に当てて残念そうにおっしゃった。一度お店を営業しながら仕込みをおこなってみたが、充分な睡眠を取ることができず身体を壊したこともあったという。

「たくさん種類や数があると、選ぶときにワクワクするじゃないで

すか」。そう話す小俣さんは、お客さんのために季節の食材を使って、ベーグルを常に17〜20種類店頭に並べている。わたしもベーグルを買いに行ったとき、あれもいい、これもいい、となかなか決められなかった。

一人でそこまで頑張れるのはなぜだろう。ベーグルは食パンなどと比べて硬いから、小さな子どもには親しみにくい。だから、小俣さんはわざわざかいベーグルを目指して作った。「子どもからお年寄りまで幅広い年代の人が食べられるベーグルがいいな」と前から思っていて。お客さんが、『子どもがプレーンを好んでよく食べる』と言ってくれたときは本当に嬉しかった」と笑顔でおっしゃる。その姿を見ると、一人で作業をするのは大変でも、そこに楽しさを見出しているような気がした。

丸く和やかに

働いているときに心がけていることをうかがってみた。すると、「ベー

グルも丸いんですけど、あんまり角ばったものが好きではなくて、自分も人と接するときそういうのは好きではなくて。丸く和やかにいられる空間であればいいなっていうのがかけてます」とおっしゃった。この心がけが、小俣さんと店内の優しくやかな雰囲気を作り出しているのだろう。

これからのことを尋ねると、「ベーグルから広がるなにかを作りたい。ベーグルも作ってプレート(一枚の皿に複数の料理を盛り付けたもの)も作るみたいな」とおっしゃった。

自分のお店を持つという夢を叶えた先に、まだまだ小俣さんは新しい夢を見つけ続けている。将来のことを語る小俣さんはキラキラしている。

「やはりベーグルは続けていくんですね」とうかがってみる。年齢的に大変なベーグル作りを、いつまで続けられるか考えることもあるそう。「でも、まだ納得いくものが作れないから作り続けたい。答えが

出ないですね、答えが出たら多分やめます」。きっぱりとそうおっしゃる。現状に満足せず、高みを目指す姿勢に憧れを抱いた。わたしも人生のなかでひたむきになれるなにかに出会いたい。

「bagel poco」のウェブサイトにある「笑顔のわつか」という言葉は、開店当初からのテーマだという。お店に足を踏み入れるとき。ベーグルを選ぶとき。そして食べるとき。きつと訪れた人みんなが笑顔だ。

小俣さんには、飾らない自然体な雰囲気の中にも情熱があり、芯がある。そして、自分の夢と相手の笑顔の輪を広げることを目指している。訪れたことがある人にもこれから訪れる人にも、素材を生かしたベーグルと小俣さんの素敵な人柄とおして、笑顔の輪が広がっていくだろう。

さんちよつを見つめる 前編

3 きよの 清野茶店



「誠心誠意」

4 下着専門店 サンワ



「品質第一」

5 ふなくぼ 舟久保たばこ店



「愛煙紫煙」

「あのお店、移転しちゃったんだ」。
「あ、ここに新しいお店ができて
る」。都留市を歩くときや、地元で
散歩するとき、少し見ないあいだ
にまち並みの変化に気づくことが
ある。いま私の目で見ることので
きるまち並みを記録したい。そう
思い、都留市の三町商店街を歩い
た。前編では昔のお話と、私が見
た三町商店街について記録する。

三町商店街は、都留市駅付近の
横町、田町、栄町の三町からなる
商店街だ。2018年7月の時点で
は、この三つのまちにある商店30店
舗が三町商店街に加盟している。

「商店街ができたのはもう、俺た
ちの親父たちの世代だねえ」。そう
話すのは、衣料品を売る大国屋の店
主である国井武彦さん（74）だ。昭
和24年の谷村の大火で三町一帯は焼
け野原になってしまった。そこで
国井さんのお父さんたちの世代が

まちを盛り上げようと考えたのが、
「十三の市」だそう。これは昭和24
年5月13日に始まり、いまでも続い
ている。毎月13日になると、加盟店が
店先に十三の市と書かれた旗を出
し、特売品を売る。この十三の市が
きっかけとなって、まちの商店街が
三町商店街として連携していくこと
が決まったそう。

商店街の昔といま

大国屋を26歳のときに継いだ国井
さんは、商店街ができた当時のこ
とを語る。「昔は商店街で企画した
招待旅行をしたりね。成田山（千葉
県の成田山新勝寺）とか行つたんだ
よ。お客さんがこんなに喜んでくれ
るのかって嬉しかった。いい思い出
だね」。

都留市の中心地として栄えた三町

サイクルセンター カワベ



「言行一致」

10 うえまつ 植松肉店



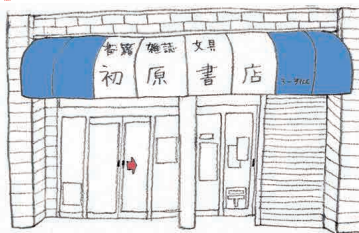
「天真爛漫」

つちや 土屋たばこ店



「一意専心」

はつはら 初原書店



「書誌貫徹」

三町商店街スケッチ（前編では中央一丁目の交差点から都留市駅側を取りあげています）



加盟店はそれぞれ経営コンセプトを四字熟語にして店先に掲げる。なかには店主が独自に作った四字熟語もある

★三町亭



三町商店街の休憩所。二階は教養教室などが開催できるスペースになっている

① 中華料理 蘭月



「日進月歩」

② スーパーウスイ



「新鮮良品」

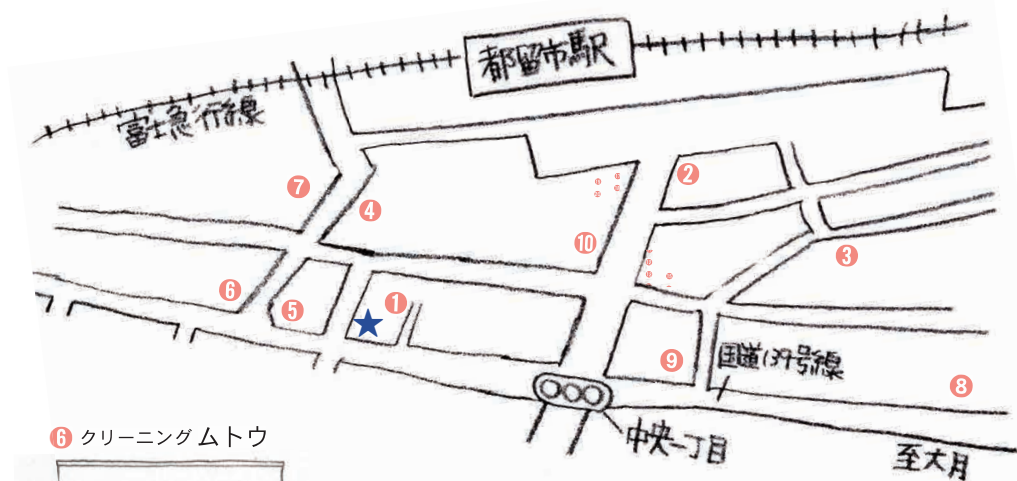
商店街。かつては道志村からもたくさんの方が来ていたという。「朝一番のバスも、夕方ごろのバスも、人がいっぱいいたよ」と国井さん。

いまは空き地が多く、廃業したり移転したりするお店が毎年あるのだそう。私は月に一度ぐらいのペースで三町商店街を訪れるが、若者に会う確率が本当に低い。よく見かけるのはお年寄りだ。

通りには人が多いイメージはないけれど、お店のなかをのぞくとお客さんが何人かいるのをよく見かける。いつ見ても、お店の人とお客さんが楽しそうにおしゃべりしている。「大きな何かじゃなくて、毎日のお客さんとの関わりだね。あのとさ買ったあれよかったよ、とか言われるのが本当に嬉しいね」。国井さんが目を細めながら言ったことを思い出した。

後編では、いまの三町商店街がお客さんどのような関わりかたをしているか、掘り下げていく。

高橋光（比較文化学科3年）Ⅱ文・写真・絵



⑥ クリーニングムトウ



「信用技術」

⑦ ドリームショップとみなが



「和気藹々」

⑧ かざま 風間商店



「飲酒満腹」

⑨ おおくに 大国屋



「心気一店」

イラスト下の四字熟語は、それぞれのお店の経営コンセプトです。

さんちよつを見つめる 後編

⑤ JEAN'S NEW YORK



「良衣気楽」

⑥ 加藤ホンダ販売



「即断即決」

⑦ オサダ薬局



「温故知新」

お客さんと関わる

今の三町商店街のまちなみを記録に残したい。そんな思いで、私はこのページを企画した。前編では三町商店街を利用する人々の、昔と今のようすを記録した。今回は、お店の人とお客さんがどのように関わっているのかを記す。

車の通りは多いけれど、歩いている人は少ないように感じる。しかし店内を覗くと、お客さんが座りながらお店の人と話をしている光景をよく見かける。あるときは薬局で、お客さんとお店の人が化粧水の話をしていた。またあるときは服屋で、店主のかたとお客さんがコーヒーを飲みながら世間話をしていた。商品の売り買いだけではない空間は、時間の流れが外よりもゆったりとして

いるようだった。

「夏はね、小学生なんか来たらスイカ切ってあげたりね」と、「フカサワ食料品店」の深沢雅寛さん(69)は話す。手があいていれば、少しの商品でもお客さんのお宅まで配達したり、配達のついでにお客さんを送って行ったりもするのだという。こういった小回りのきくサービスは、商店街ならではのものだろう。「JEAN'S NEW YORK」にはじめて訪れたとき、店主の上原香織さん(47)とお客さんが、お店の一角でコーヒーを飲みながら座って話をしていた。このお店のレジカウンターの奥にはコーヒーメーカーといくつかのカップが置いてある。その手前には小さなテーブルと、2人が座れるほどの大きな木の椅子が置か

⑮ ナカムラ薬局



「一生青春」

⑫ ボン・ジュール



「美颜美肌」

⑬ むらまつうどん



「千古不易」

⑭ 中村屋菓子店



「悠々自適」

三町商店街スケッチ（後編では中央一丁目の交差点から西涼寺側を取りあげています。）
さいりょうじ

① イワマデンキ



「修理一貫」

② ネットデンキ



「一期一会」

③ 上田酒店



「酒天美禄」

④ 深沢食料品店



「鮮菜一遇」

れている。ふつうの服屋さんには無いようなスペースが新鮮だった。「ショッピングセンターとかと違って、こういう小さい店が一つずつあるところって、なかなか入りづらいじゃない。だから、少しでも入りやすいようにって工夫してるってかんじかな」と上原さん。

上原さんにお話を聞いているとき、1人の男性が店内に入ってきた。「たまたま通つたら店が空いてたからさあ」とその男性は笑いながら話し、上原さんと一言二言交わしてすぐに帰った。「この店は商店街の角にあるじゃない。だからその道（国道139号線）を通る人には、夜ここに明かりがついているだけでも安心するって言われるよ」と上原さんは笑顔で話す。このお店は、三町商店街の近くを通る人にとつての灯台みたいだ。

上原さんは「愚痴とか、だれかに話したいとか、ほんとになんでもよくてね。なんか人と話したいってなったときにあたしを思い出してく

れたらうれしいな、と思う」と話す。そんな存在がいつも同じ場所にあって、顔を出しに行きたくなるだろう。お話を聞いているとき、店内に入ってきた男性の気持ちが分かる気がした。

「ここに来るお客さんは、自分が求めている商品をお店側が知ってくれているってことを分かっているんだよね」。そう話すのは、三町商店街振興会の事務局長であり、「ナカムラ薬局」の社長である金巻裕さん（53）だ。ショッピングモールに入っているテナントとは違い、三町商店街は都留市に住んでいる人がそこでお店を営んでいる。だからこそ、お客さんの家族構成や職業、来られる時間帯などを把握している場合が多いのだという。専門医のいる病院が限られる都留市では、身近に薬や化粧品のことを相談できる存在は貴重だ。そのうえ、お店の人とお客さんがお互いをよく知っているからこそ、相談できることもある。

⑧ 喜和田屋



「笑所福来」

⑨ ときわ商会



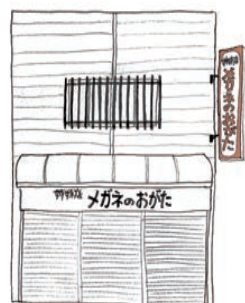
「良品色々」

⑩ だるま寿し



「一食万福」

⑪ メガネのおがた



「独立独歩」

16 野田のり茶店



「色即是空」

ふと思い出して、話をしたくなったら会いに行ける。教えて欲しいこ

* * *

17 アキヤマ電気



「大願成就」

から商店街というのは、買い物だけのために人が集まる場所ではないかと思う。人のつながりだつたり、人の興味や心を満たすためのコミュニティになっていくことが必要なんじゃないかな」。

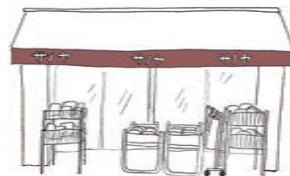
18 ブティック栄



「桃李成蹊」

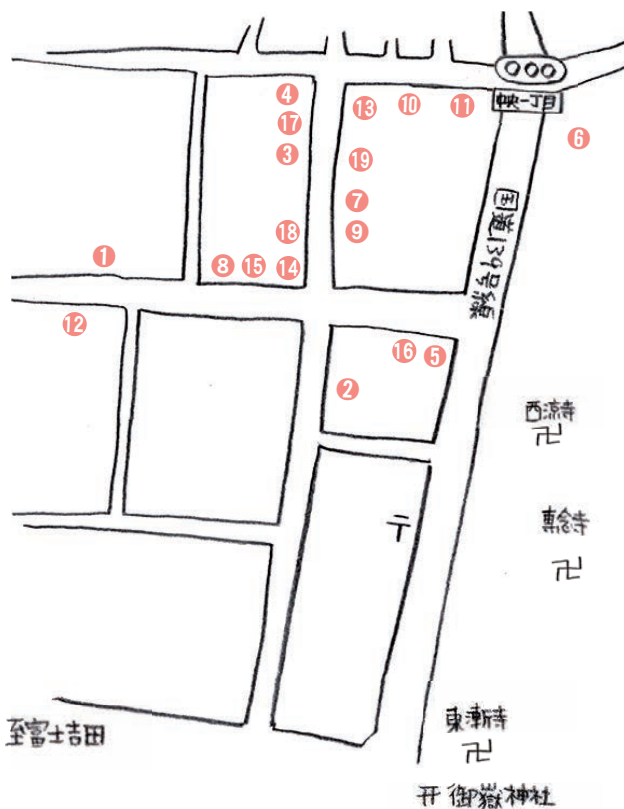
た。車で大きな商業施設に行く人が増え、スマートフォン一つであらゆるものが買える。店を経営する人の年齢層も高く跡継ぎもいないので、店は減るばかりで増えることはないという。「今は大転換の時代だね」と話す金巻さん。「これから商店街というの、買い物だけのために人が集まる場所ではないかと思う。人のつながりだつたり、人の興味や心を満たすためのコミュニティになっていくことが必要なんじゃないかな」。

19 サノヤ



「春夏秋冬」

身近に自分のことをよく知っていて、お客さんにとって心強いことだろう。多くの人が車を持ち、インターネットで手軽にものが買えるようになった今、商店街は厳しい現実と向き合わなければいけなくなつた。車で大きな商業施設に行く人が増え、スマートフォン一つであらゆるものが買える。店を経営する人の年齢層も高く跡継ぎもいないので、店は減るばかりで増えることはないという。「今は大転換の時代だね」と話す金巻さん。「これから商店街というの、買い物だけのために人が集まる場所ではないかと思う。人のつながりだつたり、人の興味や心を満たすためのコミュニティになっていくことが必要なんじゃないかな」。



とがあつたら、家電や薬のアドバイザーをもらいに行ける。この人に用があると思いついたとき、営業時間ならいつもそこにいる。三町商店街は、そんな人が集まっている場所だ。上原さんは私に、「またいつでもおいでね」と言ってくださった。三町商店街は今の私にとって、ただ通るだけの場所ではない。足を止めて「あの人、今日もいるかな」と考え

る場所になった。お店を一軒ずつスケッチすることで、看板や外観にこだわりや個性があることを知った。三町商店街のことを、自分の言葉で話せるようになった。私が記録した三町商店街は、この先変わっていくかもしれないけれど私の目で見、耳で聞いた三町商店街を、私はいつまでも記憶していきたい。

高橋光（比較文化学科3年）文・写真・絵



FIELD・NOTE 新入生だより

都留ってどんなまちだろう。そんな期待を胸にした私たちが、まちで見つけたすてきな出会いをまとめました。初めての場所、新しい発見。私たちが目線を高くしたり低くしたりすることで気づいたワクワクをお届けします。

カエルと出会った日



よく晴れた日、私は「何かおもしろいものを探しにいこう」と思い、近くにある本学のうら山に向かった。

うら山では草木がさらさらと揺れていた。「がさつ」。大きい音が足元で鳴る。「何の音だろう」と足元の木陰をのぞく。カエルだ。カエルが木の幹にしがみついているのだ。先

ほどの音は、木の幹に飛び移った音なのだろう。じつと観察してみる。

目元にはアイラインのように黒い線が入っていた。体の色は初夏のつやつやした葉の色だ。なにより、ぎゅつと木に抱きつく姿はかわいらしい。あとからこのカエルはアマガエルだと教えてもらった。

カエルを観察した日から、生活に楽しみができた。それは、カエルの鳴き声を聞くことだ。夜になると近くの田んぼから「グアグアグア」と

鳴き声が聞こえてくる。「カエルってゲロゲロ鳴かないんだ」とここでも発見がある。私が見つけたカエルもぎつと一緒に鳴いているだろう。

まちの水路や、田畑など都留にはたくさん自然がある。そこにはどんな生きものがいるのだろうか。身の回りの自然を観察することは、大学生生活での楽しみの一つになりそうだ。自然との交流をとおしてこのまちを知ってきたい。

佐藤優美(国文学科1年) 文・写真



十日市場の畑で見つけたアマガエル。葉っぱの上でたずんでいる(2020年5月30日)

ヒヨドリ



鳥は都留のまちに溶け込んでいた。鳥が苦手な私は、そのことにどうしても慣れなかった。「写真を撮ったら何か変わるかな」。そんな気まぐれをきっかけに、私はうら山へと踏み入った。

しばらくして、私は後悔することになる。鳥たちはレンズ越しの私をからかうばかりで、撮らせてなんかくれない。トボトボと帰路を辿るなか、ふと頭上の木を見上げたときであった。

そこには枝に止まり、こちらを見やる灰色の鳥がいた。あわててカメラを構える。シャッターを切るまで、彼はじつと待っていてくれた。

「なんていう名前なんやろう」

飛び立っていく背を見送った私は急ぎ足で家へと向かった。写真を観察しながら何度も図鑑をめくる。ようやく見つけた名前に私は思わず

「アッ」と声をあげた。

「ヒヨドリ」

文字をなぞりながら、小さく声に出す。撮った写真と見比べてみると、私が出会った彼は図鑑よりも太っちょでかわいらしかった。

「鳥が好き」と、まだ胸を張っては言えない。けれど「ヒヨヨ！」というあの甲高い鳴き声を聞いた時に私はなんだか誇らしい気持ちになるのだ。

高木帆月（比較文化学科1年）
Ⅱ文・写真



都留文科大学への通学路で見つけたヒヨドリ。灰色の羽毛と目元の赤褐色が特徴的（2020年5月3日）

きらわれもの？



くさい。気持ち悪い。農作物も食べてしまう。これは、きらわれもののカメムシ。なかでもクサギカメムシという種類である。都留でも身近に見られるカメムシだ。

撮った写真をよく観察してみると、意外な発見があった。全身が真っ黒ではなく、背中には白い斑点がある。

足の先は黄色い。カメムシがおいを出すのは敵に襲われたときだ。自身を守るための知恵である。一匹の虫からはその虫の生態だけでなく、生きる環境についても知ることができる。たとえばここにもいるような生きものでさえも、見えてくることはたくさんあった。今まで「なんとなくイヤだから」と意識も向けずにいたことがもつたいなく思えた。

私の地元は周りに田んぼしかなかった。生きものが多くいる。そんな環

境が当たり前すぎて気づかない部分があった。都留に来てからは、少し視野を広げてみることにした。そう

すると鳥の声や花の形、蜜を吸っている虫の姿など、さまざまなことが飛び込んでくる。ふと立ち止まって見る景色のなかには、未知のことがまだまだ隠れているのだらう。この4年間で少しでも多くの、とっておきの発見をしていきたい。

高橋杏佳（地域社会学科1年）
Ⅱ文・写真



白い壁に黒い点。イメージとは違う黒いカメムシに驚いた（2020年5月17日）

キナナルキ



都留に引越して、はやくも2ヶ月が過ぎ、新生活がスタートしました。5月のある日、大学の坂をのぼっていたときのことです。ふと顔を上げると、白い花が咲いている大きな木が目に入りこんできました。私はすぐ木の下にかけよつていき、白い花を見上げました。

この木は「トチノキ」といいます。トチノキはこの花から、3日間だけ蜜を出します。私は、まんまとミツバチのように魅惑の花に吸い寄せられていました。蜜を出し切った花は、白色から赤色へと姿を変えます。そして秋には大きな実を結び、新たな命のバトンをつないでいくのです。

トチノキを初めてみたとき、白い花は、青空にむかって力強く咲いてい



大学の入り口にあるトチノキ。今は秋に向けてちいさな実をつけている（2020年5月14日）

ました。自分の足元ばかりを気にし

ていた私に「下ばかり見ていちやだめだよ」と語りかけてくれた気がし

ます。トチノキは自分に足りないも

のを気づかせてくれました。悩んだ

ときはトチノキを見上げにいうと

思います。優しく、ときには厳しく言

葉をかけてくれる母のように、新しい

ことに気づかせてくれるはずです。

「このまま観察を続けて、大きな

実がつくのも見たい」。私はすつかり

トチノキの虜です。大学へかよう

楽しみがまた一つ増えました。

阿部くるみ（地域社会学科1年）

＝文・写真

お届けします



私は都留市夏狩にある耕雲院こううんいんとい

うお寺で地域食堂のお手伝いをしてい

る。自粛中は食堂が開催できない代

わりに「つるギフト」企画がはじまっ

ていた。食堂にはたくさんのご縁で

集まったたくさんの方の食材とお菓子が

ある。それを袋詰めにし手紙を添え、

お客さんに手渡しするという内容だ。

ギフトを自転車にのせると、初夏

のサンタのようでちぐはぐさがおかし

い。ここで困ったことが起きた。届

け先の住所が載っていない！ お届け

時間まで迫っているので慌

てて連絡をとる。そして

私はどんな出会いがある

のか少しの緊張とともに

ペダルを漕ぎだした。

届け先では電話越しに

聞いた通り、子どもたち

が玄関先で縄跳びをして

いた。自転車を止めると



届け先に向かう道のりの景色で、自分が「人間らしさ」を取り戻しているような感覚になる（2020年6月17日）

そのお母さんも迎えてくれる。ギフ

トを受け取った2人の姉妹は「はや

く食堂にいきたい！」と照れくさそ

うに笑顔をみせてくれた。ギフトで日

ごろの恩返しをするつもりが、子ど

もたちの純粋な言葉と優しさが心に

しみわたる。

社会が歩みをゆつくりにするこんな

ときだからこそ、ひとの温かさを実

感できた。この温かさを忘れちゃいけ

ない。なくすわけにはいかない。「また

ね！」と手を振り自転車を漕ぎだす

と、体がぐつと熱くなるのを感じた。

丸谷美寧（国際教育学科2年）＝文

都築初乃（地域社会学科2年）＝写真

A scenic view of a town at dusk. In the foreground, there are several multi-story apartment buildings. In the background, a range of mountains is visible under a sky with soft, orange and pink hues from the setting or rising sun. The overall atmosphere is calm and serene.

つるを歩こう

過去の記事を読みながら身近な都留を見つめ直すと
新たな気づきがうまれました。

人が歩いていないまちでは
いつもより動物がまちに出てきているような気がします。
草花は今年も変わらずのびのびと成長しています。
なかなか外出ができない今でも
お店に灯る明かりやポストに入っているチラシを見ると
人びとの営みをすぐそばに感じることができます。
身近なまちをじっくり見つめて
都留という場所のあたたかさと力強さを再発見しました。

『フィールド・ノート』では今まで
うつり変わる都留のすがたを観察し、記録してきました。
過去の記事を読み返すことは
身近なまちのよさを改めて考えるきっかけになりました。
私たちはこれからも歩みを止めることなく都留を記録していきます。





フイールド暦

立ち止まってじっくりと生きものを観察してみると、あらためて形や色の美しさに驚きます。今年の5月から6月にかけてキャンパスとその周辺で出会った身近な生きものを紹介します。

本学フイールド・ミュージアムⅡ文・写真



イカリソウ



花の形が舟の錨^{いか}に似ていることに由来するそうです。キャンパス周辺の林の縁にまとまって咲いていました。

撮影日 5月11日
場所 キャンパス周辺

ギンラン



山梨県では、絶滅危惧Ⅱ類（絶滅の危険性が増大している種）に指定されています。写真のギンランは6月には株ごとなくなっていました。

撮影日 5月15日
場所 キャンパス周辺

マタタビ



白く彩られた葉が林の縁で目立つようになりました。白くなるのは、葉の裏にある小さな花の存在を昆虫に知らせるためでしょうか。

撮影日 6月10日
場所 キャンパス周辺



マイマイガ

今年はマイマイガの仲間がキャンパスで多数見られます。10年周期で大発生するという報告があります。

撮影日 6月16日
場所 キャンパス



ランの仲間

クモクリソウだと思われ
ます。キャンパス周辺の
明るい林のなかに生育し
ていました。小さな花の
形が目にとまりました。

撮影日 6月16日
場所 キャンパス周辺



エビネ

常緑のラン科の植物です。
かつては各地の低山にふ
つうに見られたそうです。
現在はキャンパス周辺の
限られた場所しか見られ
ません。

撮影日 5月15日
場所 キャンパス周辺



ウスバシロチョウ

今年も数多くのウスバシロ
チョウに出会いました。草
原環境がまだ残っているの
でしょう。幼虫はムラサキ
ケマンを食べて育ちます。

撮影日 5月11日
場所 キャンパス周辺



ネジバナ

4号館前の中庭でネジバ
ナが咲きました。まれに
白い花をつける個体があ
るそうですが、はじめて
白いネジバナも見つけま
した。

撮影日 6月23日
場所 キャンパス周辺



アナグマの掘痕

アナグマがミミズや昆虫
などの食物を得るために
掘った穴です。キャンパ
スでもアナグマが目撃さ
れるようになりました。

撮影日 6月10日
場所 キャンパス周辺

センサーカメラが写した動物たち

本学フィールド・ミュージアムでは、本学のキャンパスの森にセンサーカメラ（赤外線を感知すると自動的にシャッターが切れるカメラ）を設置して動物の調査をしています。今号では2月から6月のあいだに撮影された動物を紹介します。今回は2015年12月に発行された本誌87号の記事と比較しました。

本学フィールド・ミュージアム＝文・写真

2020 年

①ノネコ



自然科学棟やムササビの森でよく撮影することができます。4匹ほど確認されています。(2020年5月下旬)

②テン



雑食で小動物から木の実まで幅広く食べます。自然科学棟では初めて撮影されました。(2020年6月上旬)

③アナグマ



センサーカメラでよく撮影することができます。尾と手足が短いのが特徴です。(2020年6月上旬)

④シカ



若いシカを撮影できました。最近では住宅地にも姿を見せるようになりました。(2020年5月下旬)

⑤タヌキ



センサーカメラに頻繁に写ります。近年個体数が増えてきたようです。(2020年5月下旬)

⑥ノウサギ



おもに単独で行動します。近年キャンパスでは見かけなくなりました。(2020年6月上旬)

こちらは 87 号の記事です。今年はノネコやタヌキ、アナグマ、ハクビシン、シカといった動物が多く撮影されていることがわかります。しかし 87 号では、ノウサギやカモシカ、ツキノワグマなども撮影されていました。ここ 5 年だけでも本学周辺の生態系は変化していることがわかります。これからより多くの動物を撮影観察し、本学周辺の生きものの動向について記録していきます。

2015 年

① ヤマネ



センサーカメラの上に乗っていると撮影されました。設置している巣箱でも巣材が確認されています。(2015.07.26)

② コウモリ類



今夏よりコウモリ用の巣箱を本学うら山に設置しています。設置後すぐにコウモリのものと思われる糞が観察されました。(2015.10.23)

③ ハクビシン



都市部でも観察されることが多く、電線を歩く姿などを見かけます。同じく都市部で観察されるものにタヌキなどがいます。(2015.10.23)

④ ツキノワグマ



遊歩道沿いで糞などは確認できていませんが、場所によっては日中に撮影されているところもあり、散策のさいには注意が必要です。(2015.10.23)

うら山の位置



⑤ イノシシ



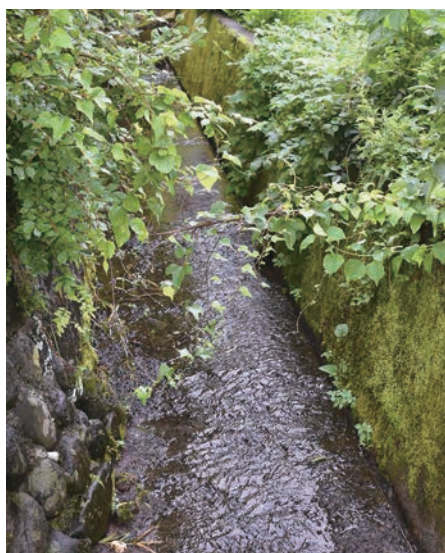
この時期子連れのイノシシも撮影されます。水場では数頭のイノシシが水浴びする姿も観察されています。(2015.08.15)

都留の風景写真集

― 新緑の候 ―

人のいない春でした。
それでも自然はいつも通りの姿を
私たちに見せてくれます。
今だけの春を堪能しようと思って、
カメラを構えました。
静かな春の終わりを感じます。

赤松 優香（国文学専攻1年） 文・写真



右上：都留市田原（2020年7月7日） 左上：都留市田原（2020年7月7日）
下：本学食堂横（2020年5月2日）



上：本学5号館裏（2020年6月10日） 中：本学本部棟前（2020年7月9日）
 左下：本学コミュニケーションホール横（2020年7月4日） 右下：都留市田原（2020年7月7日）

1年生のころの思い出

しんせいかつ



「**こん**なところにクレープ屋さんあったんだ」。食という同じ趣味をきっかけに、新しくできた友達と散歩をしているときのこと。大学の近くにクレープを販売する小さなトラックを見つけました。入学当初、週に何回か訪れるこのクレープ屋さんによって、道の脇に座りながらクレープを黙々と頬張ることが楽しみのひとつでした。ある日、お店が都留にくるのはあと数日だというお知らせを発見します。今はもう都留にはないあのクレープをもう一度味わいたいものです。(風間悠花)



せっかくだから電車を降りて写真を撮ろう。1年前の4月、桜並木にシャッターを切りました。私が通学で使っている富士急行線の車窓からは春になるたびきれいな桜を見ることができます。お花見をしながらの通学はなんだか贅沢な気分でした。何もかもが初めてで不安だった日々を心癒やしてもらったのを覚えています。それから毎年の楽しみができました。今年はお花見ができなかったのでチャンスはあと2回。来年の春こそは!と意気込んでいます。(渡邊唯)



かぞくと離れて過ごす日々、新しい友人、新しく始めたアルバイト。慣れない環境でも自分なりに楽しく過ごしていました、と今では簡単に振り返ってしまいますが、当時は毎日不安でいっぱいでした。毎晩のようにかぞくと電話を繋いで、話を聞いてもらったり暮らしの知恵を教えてください。電話を切ったあとの静まり返る部屋に寂しさを感じることもありました。大学生活4年目を迎え、そんなこともあったなあとしみじみ。あらためて、かぞくに感謝です。(宇佐美温加)



つなわたりのような緊張の毎日。4年前に大学1年生だった私は、遠い見知らぬ土地で始まった一人暮らしに四苦八苦していました。学内で迷子になり友達もできたばかりで、分からないことだらけの4月は日々心が張り詰めていました。くしくも、今年の私は大学院の新1年生です。同じ大学とはいえ、慣れないことが多く、4年前の4月と同じように冷や汗をたくさんかきました。今年こそ落ちつきと余裕を持ちたいです。(赤松優香)

次回予告 変化を楽しむ (仮)

何かにいき詰まりがちで悩むことが多くなった今、私たちの生活は変わらざるを得ない状況にあります。バックナンバーに掲載されている人の生きかたや考えかたを見返すと、そこには人生のなかで何度も訪れる「変化」を恐れずに楽しむすがたがありました。転機や出会いをチャンスに、みずから変わろうと新しいことに挑む過程やその結果はどんなものなのか。次号では「変化」を前向きに捉える人を紹介します。

都留を、観察し、記録する

FIELD NOTE

no.105 Sep.

発行人

北垣憲仁 (40-41)

統括編集者

西教生

編集長

宇佐美温加 (6-7.18-19.46)

風間悠花 (4-5.18-19.46-47)

副編集長

深沢有佳 (1-3.8-9.47-48)

渡邊唯 (8.18-19.38-39.46-47)

編集

赤松優香 (8-9.44-45.46)

山本義城 (8-9.42-43.47)

阿部くるみ (35-37)

佐藤優美 (35-37)

高木帆月 (35-37)

高橋杏佳 (35-37)

丸谷美寧 (35-37)

伊藤瑠依 (1-48)

ロゴデザイン

工藤真純

[] は編集担当ページ

FIELDNOTE (フィールド・ノート) 105 号

発行日: 2020 年 9 月 10 日

発行部数: 2800 部

発行・編集:

〒402-8555

山梨県都留市田原 3-8-1

都留文科大学

地域交流研究センター

『フィールド・ノート』編集部

E-mail: field-1@tsuru.ac.jp

バックナンバーは都留文科大学地域交流研究センターにありますので気軽にいらしてください。



しんせんな空気、鮮やかな緑。都留に初めてきたときは、地元との環境の違いに驚きました。私の実家は山梨県の南アルプス市ですが、同じ県でもまったく違います。特に衝撃を受けたのは、坂が多いことです。電車に乗って駅についたとき、もう少しで大学というところで、あの文大坂と呼ばれる急な坂を登らなければなりません。息がきれるほどでしたが、一年経験してようやく慣れてきました。4 年間負けずに登りつづけ、足腰をきたえたいです。(深沢有佳)



い ち年前か…入学してもう 1 年が経つのかとつい最近思いました。新生活!新しい土地で!わくわくもしましたが、たくさん不安もありました。本学は全国から学生が集まります。同郷の人を見つけては話が盛り上がったのを思い出します。大学では新しい学問であったり部活、新しい友人と、楽しいことが多すぎるくらいあって不安もすぐなくなりました。楽しい時間はあっというまに過ぎ去ります。今の時間を大切に、後悔のない学生生活を送りたいものです。(山本義城)

フィールド・ミュージアム

都留フィールド・ミュージアムとは?

私たちのフィールドは、特定の地域に固定はしませんが、とくに都留市を拠点として富士山とその山麓、桂川(相模川)流域に注目して活動しています。

名称について:大学だけの取り組みではなく、広く市民と共有し、地域に開かれた交流を育みたいという思いから、「都留フィールド・ミュージアム」という表記を用いています。本学の地域交流研究センターが、この活動を担っています。

都留市産の自然薯